



黎明期の血統 (11)

III. 配 合

最終回は「配合」について。

配合論といふものは、ある程度未来を予測する部分、つまり実際の生産に結び付く箇所がなければただの結果論になってしまふ。当然、遙か昔の配合について述べる場合には、どんなに詳しく当時の馬の能力や血脉の関係性について論じても、そこから現代に通用するような普遍性を導き出さなければ、ほとんど意味がない。

約200年前、ウェザビー社によって『ジェネラル・スタッドブック (英國血統書)』が刊行されたが、その大きな目的は「不正確な血統をなくす」ことだった。もちろんそれ以前は血統の登録機関など存在しない。資料の不備などにより正確な血統が判明しない場合は、不確かな伝聞に基づいて血統を遡っていかざるを得なかつた。こうした事情があるだけに、スタッドブックに記載された親子関係はすべて正しいとはいはず、何%かは間違っている可能性がある (というよりも確実に間違っている筈である)。誤ったものをベースに論を組み立てても仕方がないので、とりあえず細かい配合の話はやめて、ヘロド Herod という大きな存在を中心に話を進めていきたい。

本誌505号、510号で述べたように、18世紀半ばに出現した Herod は、種牡馬としてそれまでの常識を覆す並外れた成功を収めた。この「血」は競走馬の進化にめざましい成果をもたらし、サラブレッドをもう一段上のレベルに押し上げることに成功した。18世紀末から19世紀初頭にかけての代表的な競走馬、種牡馬の血統をみると、Herod のインブリードによって成功したものが圧倒的な割合を占める。

Herod-Highflyer-Sir Peter の親子孫3代が30年間にわたってリーディング・サイアーの座をほぼ独占したこととは以前に述べた。この期間を過ぎた後は、さまざまな種牡馬が入り乱れる群雄割拠の時代となり、短いサイクルで首位が交代することになる。1810年に Sir Peter が Waxy に首位を明け渡してから20年後の1830年まで、計13頭が首位種牡馬となっているが、そのうち、血脉の中に Herod を含まない馬は皆無、Selim 以降の11頭

首位種牡馬	繩	Herod の形態
Waxy	E	母の父
Sorcerer	M	母の父の2代父
Selim	H	3×4
Rubens	H	3×4
Walton	H	3×4
Orville	E	3×3
Soothsayer	M	5×4
Phantom	H	4*5×4*5
Election	E	3×3*3
Whalebone	E	3×4
Filho da Puta	H	4×4*4
Blacklock	E	4*5×4*4
Emilius	E	4*4×5*5

※ E—Eclipse、H—Herod、M—Matchem の略

はすべてクロスの形で持っている。

Orville は一応、Eclipse のサイアー・ラインに属しているが、血統の内実は Herod の 3×3 であり、ほとんど Herod の直系と呼んでもいいほどだ。Election などは「3×3*3」とさらに強烈である。

重要なのは Herod や Eclipse、Matchem といった父系のラインではない。すべての馬が「Herod 化」したことである。

Herod の血を取り入れるか入れないかによって、当時の馬には大きな能力差が生じた。Herod を取り込んだサラブレッドは、その優秀な競走能力、繁殖能力によって Herod を持たない馬を凌駕し、広く子孫を残す。さらにそうした種牡馬と繁殖牝馬が出会うと、必然的に Herod のインブリードが生じ、生れた子は親を上回る能力を発揮する。次々と Herod の血を加え、息子の Highflyer を継続するなどして、サラブレッドの能力はグングン上昇していった。

幾重にも Herod の血を重ねることによって確実に競走馬が強くなつたのは事実だが、もちろんそれには限界がある。次第に思ったような効果が表れなくなり、競走能力は停滞していく。その原因は「血の飽和」にある。一杯のコーヒーに溶ける砂糖の量に限度があるように、「これ以上 Herod を加えても能力的なプラスにならない」という限界点がある。それを超えた状態が「血の飽和」である。

血の飽和を迎えてなお、Herod の力に依存することは、水の出ない井戸を堀り続けるのと同じである。

この馬の活力に頼りきっていた Herod 系、あるいは Election や Orville などの系統も、一時的に隆盛を誇ったものの結局途絶えてしまった。ある時期までは Herod という「魔法の杖」がオールマイティーな力を発揮していたが、ある日を境にその杖が「ただの棒」になってしまった、支えを失った馬たちは停滞に陥る、という構造である。新たな活力を得、再び上昇に転じるには、それとは別の血に活路を求めなければならぬ。

全サラブレッドの能力向上のために自身の遺伝的インパクトを蕩尽した Herod は、出涸らし状態となりその後の役割を終える。長かった「Herod の時代」は幕を閉じたのである。

ひとつ断わっておけば、こうした状況は黎明期ならではの極端なケースであり、現代においてはほとんどありえない。競馬が世界的に拡がり、当時とは比較にならないほど生産頭数が膨れ上がった今、ある特定の血脉が突出することは物理的に不可能だからである。Northern Dancer 系がどれほど隆盛を誇ろうと、昔と違って多彩な血があふれているため、「血が偏る」ほどの事態に陥ることはない。仮に将来、Northern Dancer 系が種牡馬界の主役でなくなったとしても、それは単純にサイアーラインの主導権の問題であり「血の飽和」が理由ではないだろう。

18世紀当時はほぼイギリス一国でサラブレッドの生産が行われており、その頭数も1000頭に満たない僅かなものだった。ある特定の血が飽和状態になったとしても、それを薄める受け皿がなかったが、各国で生産が行われるようになった現代においては、そうした危惧もほとんど無用である。たとえば、19世紀のフランスとアメリカには、すでにイギリスで滅びた父系が数多く独自のライ

ンとして発展していた。いろいろ理由はあるが、それらの国の牝馬が持つ異質な血脉が飽和を防いだ、という説はおそらく正しいだろう。血統の国際化とは、そうした「受け皿」を増やすことに他ならない。優れた血であれば Nearco や Ribot や Northern Dancer や Forli のように、世界中のどんな地域からでもたくましく伸びてくる。伸びてくるからこそ適度にバランスが保たれ、Herod の頃のような血の偏りが生じないわけである。

Northern Dancer を内包しているからといって、種牡馬あるいは繁殖牝馬としての可能性が狭められるということもない。確かに Northern Dancer は No. 1 だが、世界中どこでもというわけではないし、特にアメリカや南半球では他の系統が強さをみせている。昔と違ってさまざまなラインがそれなりの勢力を持ち、輸送手段の進歩によりそれらが国際間を往来しているからこそ、ある系統が爆発的な成功を収めることもないし、急激に衰えることもない。No. 2 以下の優れた血を選んで配合していくけば、相手に困るような事態に陥ることはない。Native Dancer、Blushing Groom、Mill Reef、日本では *パーソロン、*テスコボーイなど、相手とすべき優秀な血は山ほどある。

つけ加えれば、今までの血統の歴史を振り返ってみても、新しい血が生まれ、更新される場合には、それまでの最良の血を利用していることが多い。Northern Dancer は Nearco と Hyperion を持ち、Nearco と Hyperion は St. Simon を色濃く持ち、St. Simon は Pocahontas を持つ。Pocahontas は Stockwell や Rataplan、King Tom らの母で、これらは Whalebone の全きょうだいの影響を濃く受けている。Whalebone は Herod や Snap、Eclipse によって作られ、これらは Old Morocco Mare の影響下にある馬たちである。この先現れるであろう新たな No. 1 は、血脉のどこかに Northern Dancer を取り込んでいるかもしれない。

Northern Dancer クロスは今のところ嫌われているが、最近になってぼちぼちと活躍馬が開始しており、それほど神経質に避けることもないだろう。現在成果を上げている Native Dancer クロスにしても、その効果が確かめられた（つまり大レースを勝ち始めた）のは自身が誕生してから約30年後、1980年代に入ってからだった。Northern Dancer 自身の生年（1961）からみても、このクロスの結論を出すのはこれからという気がする。

さて、黎明期の血統を締め括るにあたって、当時を代表する名馬 Highflyer の血統を簡単に分析してみたい。なぜこの馬を選んだかというと、種牡馬として最大の成功を収めただけでなく、もっとも基本的な配合のエンセンスを幾つか含んでいたためである。

①優れた血を重ねる

父 Herod はもちろん、母の父 Blank、2代母の父 Regulus もリーディング・サイアー。当時は、良い影響をもたらす血をどれだけ搔き集められるかという、単純な「足し算配合」の時代だったので、こういうパターンを持つ馬は強かった。現代の配合はこれほど易しくはないが、それでも「平凡な血」より「優れた血」を重ねた馬の方が有利であることには変わりない。

②母系に強いインブリードがある。

母あるいは2代母の持つ強いインブリードは、この時代だけでなく現代の活躍馬の血脉にも広く認めることができる。固定化された影響力が、1、2代隔てることにより安定した活力として供給できるからだろう。Highflyer の母の場合、Godolphin Arabian のインブリードを探っているが、この血はリーディング・サイアーや

にも輝いており、前世代の最優良血脉の一つである。

③全兄弟クロス

Flying Childers とその弟 Bartlet's Childers の全兄弟クロスは、18世紀におけるもっともポピュラーなパターンで、数多くの活躍馬のなかに認められる。次の時代は Whalebone と Whisker と Web、その次は Stockwell と Rataplan というように、時代を風靡するクロスは移り変わったが、この手法の有効性はいつの時代も変わらない。ちなみに、現代における最も注目すべき全きょうだいは、Lt. Stevens と Thong。前者は Alysheba、Lear Fan などの母の父であり、後者は Nureyev の2代母、Sadler's Wells 3代母にあたる。これらの組み合わせから近い将来、欧米のクラシックを賑わす馬が現れるだろう。

④牝馬クロス

優れた牝馬クロスには、牡馬のクロスをはるかに凌ぐ影響力がある。Highflyer は Curwen Bay Barb Mare 4 × 5 を探っているが、他の活躍馬のなかにもしばしば見られる実績のあるクロスである。何でもいいから牝馬をクロスさせれば良いのではなく、あくまでも優れた血でなければならない。この Curwen Bay Barb Mare は「フ

5代目までに生じたクロス
Godolphin Arabi. 3 * 4 (母系)
Darley Arabian 5 × 5
Curwen B.B.Mare 4 × 5
Betty Leedes 5 × 5

近親
1 Mark Anthony (兄) 1767

Highflyer 牡 1774 鹿

Tartar 1743 鹿	Partner Meliora	Jigg Curwen B.B.Mare	Byerley Turk Spanker Mare Curwen Bay Barb Old Spot Mare
Herod 1758 鹿		Fox Milkmaid	Clumsey Bay Peg Snail Shields Galloway
Cypron 1750 鹿	Blaze	Flying Childers Confederate Fil.	Darley Arabian Betty Leedes
	Selima	Bethell's Arabi. Champion* Mare	Grey Grantham Duke of R.B.B.M.
Blank 1740 鹿	Godolphin Arabi.		Champion* Darley A. Mare**
Rachel*	Little H.Mare	Bartlet's Child. Flying Whigg	Darley Arabian Betty Leedes William's Arabi. Points
Regulus Mare 1751	Regulus	Godolphin Arabi. Grey Robinson	Bald Galloway Snake Mare
	Soreheels Mare	Soreheels Makeless Mare	Basto Curwen B.B.Mare Makeless Kitt D.R.Mare

栗山 求

アミリー」の項で述べたように歴史的な名牝であり、その効果は相当なものであった筈である。ありふれた配合手法なので例を挙げれば枚挙にいとまがないが、今年のケンタッキー・ダービーの2番人気 A.P. Indy は、母が Somethingroyal 2×4 である。Somethingroyal は言うまでもなく Secretariat と Sir Gaylord の母。近年の米国競馬における名繁殖牝馬の1頭である。ちなみに A.P. Indy の2歳上の半兄には Summer Squall という超一流馬（ブリーカネスS優勝）がおり、たて続けにこれだけの馬を出したということで、母 Weekend Surprise も歴史に残る繁殖牝馬に数えられそうだ。この馬のパートナーは②の項とも関連がある。

さて、11回にわたって連載してきた「黎明期の血統」もこれで終了。いろいろと書いてきたようで、書き漏らした点も多いことに気付く。特に Eclipse についての考察が手薄になってしまったようだ。それはまた、いつか別の機会に譲るとしよう。退屈さをこらえて読んで下さった方には感謝したい。

これらの世界は、現代の血統に何ら影響を及ぼしてはいないが、決して無縁ではない。世界中すべてのサラブレッドの中に存在する物語なのである。 (終)

《血統表索引》

Aimwell	506- 9
Bartlet's Childers	513-20
Blacklock	509-14
Buzzard	510-15
Cade	513-21
Comus	507-19
Crab	514-18
Diomed	510-14
Eclipse	508-18
Election	509-15
Fox	513-21
Gohanna	509-15
Goldfinder	508-18
Hambletonian	509-14
Herod	505-15、510-14、514-18
Highflyer	505-15、511-14、517-20

Jigg	513-21
King Fergus	509-13
Mark Anthony	506- 9
Marske	508-18
Matchem	507-18
Medley	507-19
Orville	509-14
Partisan	511-15
Patner	510-13、514-18
Paulowitz	511-15
Phantom	511-15
Potbo's	508-19
Regulus	507-17
Selim	510-15
Sir Peter	505-15、511-14
Snap	508-17、514-18
Snip	514-18
Soothsayer	507-19
Sorcerer	507-18
Tartar	510-14
Tramp	509-15
Trumpator	507-18
Walton	511-14
Waxy	508-19
Whalebone	508-19、514-18
Woodpecker	510-15

《参考文献》

『THE CLASSIC PEDIGREE 1776-1989』

(MICHAEL CHURCH 著、RACING POST 刊)

『THREE CENTURIES OF LEADING Sires 1721-1987』

(MICHAEL CHURCH 著、RACING POST 刊)

『競馬の世界史』(ロジャー・ロングリック著、鶴巣治訳、日本中央競馬弘済会刊)

『競馬』(デニス・クレイグ著、佐藤正人訳、中央競馬ビーアール・センター刊)

『FAMILY TABLES OF RACEHORSES VOL. III』

(白井透著、サラブレッド血統センター刊)

『THE CLASSIC RACEHORSE』

(PETER WILLETT 著、STANLEY PAUL 刊)